

## 「剪纸は女の心の歌」——形象化を支える物質性と時間

東京大学大学院総合文化研究科博士課程

丹羽朋子

絵/画的なモノの研究は従来、空間的な構造や、制作の結果として表象される対象の理解に重点が置かれてきた。ここには「人が予め考えた意味内容を形式に反映させ、素材にかたちを与える」という見方、いわば「精神・形式 / 物質」という二分法的思考がみえる。これに対して本発表は、単に表象的意味や価値に還元することなく、絵/画が物質性ある「もの」として現前する局面に即しながら、さらにそれをめぐる経験が人々の社会的アクチュアリティとどのように関わり得るかを考えていく。制作や使用を通じて絵/画が作者・観者にある形象を現出するプロセス（形象化）について、この現象を支える物質性と時間に焦点をあて分析を試みる。

事例とするのは中国・陝北地域（陝西省北部）の剪纸である。これは元来、家の幸福を願って作られる正月飾り等の切り紙細工であり、馨洞と呼ばれる横穴式住居の室内外の装飾や儀礼に用いられる。陝北の剪纸は古くから農村女性の農閑期の愛好であったが、新中国建国期以降はプロパガンダ芸術に流用され、また文革期には旧風俗として禁じられるなど、激動の時代に翻弄された歴史をもつ。80年代からは国の後押しで「剪纸学習班」が実施され、現在では兼業作家も登場するなど、地域を代表する「民間芸術」となっている。

陝北では「剪纸は女の心の歌」と言われる。これは、剪り手女性の多くが文字を解さず、また「男は外、女は内」という規範が強い農村部では、男たちが山野で歌う民謡に比して、剪纸が女の内なる思いを発露する手段とされることによる。このことも手伝い、近年の「民間芸術」研究では剪り手を「芸術」の主体とみて「個性」あるスタイルを賛美する向きがあり、「非物質文化遺産」（無形文化財）や優秀技能継承者（「民間芸術大師」）の認定制度がそれに拍車をかけている。だが発表者は現状を見る限り、陝北の剪纸に、実用品から西洋近代的「芸術作品」への移行、それに伴う価値や意味の変容といった、交換論的或いは芸術システム論的な分析枠組はあてはまらないと考える。外部の研究者の高い意義づけとは裏腹に、現地での剪纸はいまだ使い捨ての装飾品という扱いが主流であり、その存在自体もはかなく見える。そしてこのことこそが、剪纸の存続にとって重要だと考えるからである。

では（文革期の禁止や、生活の現代化に伴う実用品としての不要等の逆境にも関わらず）、なぜ今も、またいかにして剪纸は「女の心の歌」であり続けているのか。この問いは、剪纸をめぐる人々の言説分析だけでは解けない。議論を先取りすれば、剪纸とは即ち、紙（素材）を鉸（道具）を用いてかたちを切り出したモノや技術であり、物質性を支えに形象化するプロセスにおいて、制作者や観者の情動と結びつき、或いは記憶や希望と行き来しうる一連の実践だと言える。さらには、これが陝北の女たちにとっていかなる経験であるかを考える必要があるだろう。

本発表は、同じく前述の問いを掲げた拙論[丹羽 2011]の延長線上にある。そこでは「個別具体的な実践のなかに〈ものの現れ〉をみる」という方法論を提起するべく、人/身体-もの-環

境のインタラクションを議論の中心に据えて、反復的な剪紙の制作・使用において、「かたち」と歌・言葉との響き合いが生じ、「かたち」の更新や情動の喚起が促される過程を論じた。だが、「もの」としての現前の次元にとどまっているという点で、この分析は剪紙の動態の側面しか捉えていない。なぜなら（前掲稿では扱えなかったが）、実際には「民間芸術」化の過程で旧来の動植物の図像に加えて、「陝北農民＝自ら」がモチーフとなり、描かれるものが複雑化したことが、現在の剪紙のあり様の分析に重要だと考えられるからだ。いうなれば、T.Ingold[2010]が水面を泳ぐ魚を描いた水墨画や、大工が鋸で木を切る行為を例に展開する「つくること＝素材に従う」という視座は、人間中心主義的思考の解体には有効だとしても、なぜ絵画である剪紙が「女の心の歌」となり得るのかという問いの答えには不十分なのである。

以上を踏まえて本発表は、「時間」という視角を導入することで、より複層的な形象化のプロセスにアプローチしたい。具体的には、剪紙の物質性とその形象化をめぐる時間の諸相を、大きく二つの相に分けて考察する。

(I) はかなき「紙」としての剪紙、その生成と消滅

(II) 絵/画が物質的に実現していく過程＝形象化の装置としての剪紙が孕む複数の時間性

(I) は主に、紙という素材に対する時間の浸蝕・変質作用（破れる・燃える）と、円環的時間（一年の周期、陰陽両界）の関係を述べる。(II) では具体的な剪紙作品を例に、剪紙特有の技法に導かれる制作行為の時間の流れにおいて、(a) 運動性＝時間を帯びた対象の像（例えば「走る馬らしさ」として描出される）に加えて、(b) 神話や伝説の場面、(c) 過去の記憶や未来への希望的展望を投影した像などが、紙の上で「部分」としてモザイク状に結びつき、多様な時間が重なり合って絵画という一つの全体（新たな形象）として現れることを論じる。さらに出来上がり、物質性に支えられた安定した事物——画家のクレーはこれを生成する形の死と述べた——となった後も、剪紙の形象は剪り手や観る者にそのつど現れ、ときに対話の契機を生み、いわば「死後の生」を生きる。こうして、剪紙という「もの」を触媒として、物質性を帯びた形象＝「かたち」のみならず、剪り手や見る者もまたそのつど、つくられていく。

ここで、(I) で論じるはかなき「もの」としての剪紙の物質性、それがもつ時間の作用によって剪紙の更新が促されることが、改めて重要性を帯びるだろう。このようにして通時的・共時的な個体の集合体として剪紙という「もの」が持続することと、「陝北の女」としての生が生きられつつ更新されていくことの関係性を射程に入れ、考察を進めたい。

#### 【参照文献】

Ingold, T (2010) The textility of making. *Cambridge Journal of Economics*, 34(1): 91-102.

丹羽朋子(2011)「かたち・言葉・物質性の間：陝北の剪紙が現れるとき」床呂郁哉・河合香吏編『もの人類学』京都大学学術出版会。